

## 20世紀におけるビルドゥンクスロマン概念の 共通見解形成過程とその問題について

北原 寛子

### 1. ビルドゥンクスロマン概念規定の難しさ

ビルドゥンクスロマンBildungsroman（いわゆる「教養小説」）は、文学用語として日本でも一般に広まっており、作品を評する時に適宜用いられている。そうした現状から、小説のジャンルとして確固たる地位を築いているように考えられている。百科事典の「教養小説」の項目には次のような説明がなされている。

日本では「ビルドゥングスロマン」[sic]を「教養小説」と一般に訳しているが、これは「ビルドゥング」という言葉に教養という意味があるからである。しかしこの言葉には同時に形成という意味があり、ビルドゥングスロマンのビルドゥングという言葉でも、教養のほかに、その教養にいたる過程の自己形成の意味が強く込められている。したがって、二重の意味をあわせもったこの言葉は訳出不能に近く、各国ともBildungsromanという原語をそのまま使っているようである。

[中略]

時間の流れのなかで、外界の影響を受けながら行われる主人公の自己形成を描いた小説であるビルドゥングスロマンは、生成とか発展を重く見るドイツ人特有の心情に根差したドイツ文学独特の基本的な小説形式とみられるが、もちろんドイツ文学のみにある小説形式とはいえない。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 柏原兵三：「教養小説」。In:『ブリタニカ国際大百科事典 第五巻』 第三版四刷 1996年、248頁。

この説明は、この概念を生み出したドイツ文学研究の成果に則ったものである。現在はこのような共通見解が成立しており、広く受け入れられている。これまでの200年を超えるビルドゥンクスロマンの歴史を鑑みて、定説は無理のある部分が解消され、誤解や間違いは淘汰されて成立しているはずだと考えられているかもしれない。しかし、もしこの共通見解がさまざまな問題を未解決のまま含んでいるにもかかわらず、都合の悪い箇所を除外して考えたり、包括的な定義へと再設計する努力を先延ばしにしたりすることで成立しているとすればどうだろうか。人口に膾炙した意見だからこそ、先入観や事実誤認によって問題を内包するリスクも高くなるのである。そのようなわけで、たとえ概念についての同意が一般にあるとしても、研究においてこの概念を再考察する必要があるのは当然のことである。本論の課題は、まずビルドゥンクスロマンの今日の共通見解とは何か、そして何が見落とされているのか、何が問題なのかを指摘することである。そしてさらに、これらの問題を解決するための道筋を提示していきたい。ビルドゥンクスロマンに関するテキストはあまりに多いので、本論では逆に少ないテキストから議論の要点と問題の本質を明らかにするように努めたい。

いざビルドゥンクスロマン概念の研究書を紐解いてみると、この概念をどのように規定しうるのかという苦慮から議論が始まっている。研究の最前線では、この概念がいまだに確固たる定義をされていないことは了解済みなのである。例えば、ドイツ文学のさまざまな研究分野を紹介しているC. H. ベック社刊の「文学史のためのワークブック」シリーズにある『ドイツのビルドゥンクスロマン 18世紀から20世紀のジャンル史』では、次のように指摘されている。

ビルドゥンクスロマンの場合、ジャンル定義の問題は議論の余地なくとてもデリケートである。この概念はイデオロギー的な諸要求という重荷を負っている。それは例えば、この文学ジャンルにおいてドイツの本質が非常に強く表れているといったような折に触れて示されるような主

張である。あいまいさは多義的な規定語「Bildung (=形成／陶冶／教育 [H. K.]）」のためでもある。これまでは、テキストの中でゲーテ時代のビルドゥンクBildungのイメージが本質的な範疇にあることを証明できる場合にのみビルドゥンクスロマンというべきであるという主張がなされてきた。そのようにして考察する時、ジャンル範囲の決定が困難になると思われる。20世紀の小説や他の国の文学作品をジャンルに含める可能性を最初から閉じてしまうべきか否かを考えなくてはならないだろう。<sup>2</sup>

ここで指摘されている概念規定を困難にしている要因は3点にまとめられる。1つは、ビルドゥンクスロマンはドイツ的であるという思想傾向と結び付けられていることである。2つ目は、ゲーテ時代との関係である。そして3つ目は、ドイツ内外にかかわらず「ゲーテ時代」以外の作品とどのように関連付ければいいのかという問題である。この中で一番重要な問題は2つ目に挙げられたゲーテ時代との結びつきである。この理由を考察すると、その他2つの問題がなぜ発生したのかがおのずと明らかになるであろう。

この研究書を著したうちの1人ユルゲン・ヤーコプスは、1972年に『ヴィルヘルム・マイスターとその兄弟たち』<sup>3</sup>という著作を発表している。その中でヤーコプスは、ゲーテ時代の人格陶冶ビルドゥンクを本質的に表現している作品は『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(以下『修業時代』)以外にないと主張していた。そのため、ビルドゥンクスロマンは正統な作品が1つしかなく、ジャンルと考えられていながらジャンルを形成しえない、いわば決して成立することのない未完成のジャンルであると結論付けている。つまり、1972年時点でのヤーコプスにとっては、ビルドゥンクスロマンは『修業時代』の別名・称号・形容であるということになる。しかし、ビルドゥン

<sup>2</sup> Jürgen Jacobs u. Markus Krause: Der deutsche Bildungsroman. Gattungsgeschichte vom 18. bis 20. Jahrhundert. München 1989, S. 18.

<sup>3</sup> Jürgen Jacobs: Wilhelm Meister und seine Brüder. Untersuchten zum deutschen Bildungsroman. München 1972.

クスロマンはジャンルとして一般に受け入れられている。彼は自説を実際の状況に合致するように修正を加えている。クラウゼと共同で執筆された1989年の研究書では、ビルドゥンクスロマンをジャンルとみなすことができるように、次のように説明されている。

文学史家たちも、ドイツの小説史においてゲーテのかの著作（＝『修業時代』[H. K.]）をもっとも影響力のあった範例とみなすべきことを強調してきた。それゆえに、ビルドゥンクスロマンというジャンルの定義を、『修業時代』が規範として影響を及ぼしたドイツ文学の発展のある流れをまとめている、と想定することは意義あることだ。この場合、定義は緩やかな状態のままであるべきで、この小説のタイプの歴史的な制限を広く受け入れることができる。<sup>4</sup>

これは先に挙げた概念定義における第三の問題「ゲーテ時代以外の国内外の作品をどのように関連付けるべきか」に対して提案された解決策である。ヤーコプスとクラウゼは、ビルドゥンクスロマンとは『修業時代』の影響を受けて創作された小説をすべて含むことができると枠を広げることで、ドイツ内外を問わず、より多くの作品をジャンルに含める可能性を示している。しかしこの方法では、『修業時代』以前の作品はどのように扱うべきかが解決しない。このような矛盾を解決するためにヤーコプスとクラウゼは、発展物語Entwicklungsgeschichte<sup>5</sup>や教養物語Bildungsgeschichte<sup>6</sup>という概念を用いている。これらの用語が厳密に何を指し、ビルドゥンクスロマンとどのように異なるのかについて詳しい説明がなされていないが、使用している文脈から、発展物語は主人公の成長を描いた作品を指し、作品が成立した時代に関わらず、内容を基準にした類型の意味で用いられていると解釈できる。教

<sup>4</sup> J. Jacobs/ M. Krause, a. a. O., S. 18.

<sup>5</sup> Ebd., S. 53.

<sup>6</sup> Ebd., S. 51, 55.

養物語は、ビルドゥンクスロマンという複合名詞の後半部分「小説」-romanが「物語」-geschichteに置き換えられた語であるが、『アガトン物語』のように比較的ゲーテに近い時代の『修業時代』に先行する作品を対象にして用いられている。<sup>7</sup>『アガトン物語』のように明らかにゲーテの活動時期と重なる時代の作品がビルドゥンクスロマンから除外されて、このように別の用語があてがわれている根拠についてヤーコプスとクラウゼは直接触れず、ビルドゥンクスロマンは『修業時代』より後の作品と説明していることから推測可能なだけであり、それ以上に明確な根拠が示されていない。これらの類義語の用法をめぐるのは、先行研究の影響があると考えられるが、これについてはのちに触れることにしたい。

同じようにロルフ・ゼルプマンもビルドゥンクスロマンについて包括的な研究書を著し、概念定義の壁にぶつかっている。彼は先行研究を多く紹介しているが、概念定義については最終的に次のように述べている。

ビルドゥンクスロマンというジャンルの把握を提案されたようにすっかり断念するとすれば、まさに非常に重要なテキストが位置している、このジャンルの境界領域のそれ以前の期間への経路を限定しないで済むという利点になるだろう。この小説やあの小説はもうビルドゥンクスロマンで、これはまだで、これはもうビルドゥンクスロマンではない、といった争いは確かに避けうる。しかし問題が解決したわけではない。むしろ実在しない完全な体系可能性という、うわべの実際的なイメージに屈服することになる。<sup>8</sup>

ゼルプマンは、彼に先行する研究ではビルドゥンクスロマンの適用範囲をめぐる議論が合理的な解決策を見出すことができないまま続いてきた状況を

<sup>7</sup> Ebd., S. 51.

<sup>8</sup> Rolf Selbmann: Der deutsche Bildungsroman. 2., überarb. und erw. Aufl. Stuttgart 1994, S. 27.

認めている。そのうえで定義を試みることを断念し、問題を棚上げしてこれまでの慣例に従属することを選択肢として挙げている。慣例的なビルドゥンクスロマン研究でこれまで選ばれてきた方法は、このゼルプマンの例にみられるように、概念の徹底した検証ではなく、最終的な解決策の先延ばしして従来の見解を守ることであった。結局のところ、ゼルプマンもヤーコプス／クラウゼと同様に、概念定義の疑問を明らかにするために議論することはなく、『修業時代』以降をビルドゥンクスロマンとし、それ以前の作品に類似の概念である教養物語Bildungsgeschichteなどを援用している。このように補助的な概念を恣意的に用いることが不合理と認識されているにも関わらず、その解決へ踏み出すことを躊躇する不自然な状況に陥っているのである。

なぜビルドゥンクスロマン概念の場合には、合理的な定義の再設定がこれほどまでに困難なのだろうか。その理由は、共通見解の原型が先に提出され、それに適合させるように事実を説明しようとしているからである。この原型は、ディルタイの記述である。それは他のテキストを解釈し書き換えることで成立したため、文学史の断片的な期間ならば説明可能であるが、ジャンルの定義に敷衍することが困難なのである。

## 2. ディルタイを経由したテキスト伝承とその問題

今日のビルドゥンクスロマン概念の直接の起源とされているのは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した歴史家ヴィルヘルム・ディルタイである。彼の膨大な著作の中でも、多くの研究が参照している箇所は2箇所である。1つは『ヴェスターマン月報』1867年5月号に発表され、その後1905年に『体験と詩』に所収されたヘルダーリン論の次のような一節である。

ヒュペーリオンはビルドゥンクスロマンに属している。それは、ルソーの影響のもとにドイツで私たちの当時の精神が内面文化に向かっていたという方向から発したものである。それらの中で、ゲーテやジャン・パ

ウルに続いて、テークのシュテルンバルトやノヴァーリスのオフターディンゲン、ヘルダーリンのヒュペーリオンが、文学的にみて長期にわたる有効性を発している。ヴィルヘルム・マイスターとヘスペルスに始まって、それらはすべて当時の若者たちを描いている。主人公がいかにして幸福な日の出の中で人生に踏み出すのか、共感できる魂を求め、友情に出会い、愛にめぐりあうのか。そしてさまざまな人生経験で成熟し、自らを見出し、世界の中で自分の使命を自覚するに至るのか。

[中略]

このようにビルドゥンクスロマンは、個人的な生活の領域に関心が限定された文化の個人主義を表している。官僚制や軍備における国家の権力は、ドイツの中小領邦においては、若者や若い作家たちにとって外的な力として作用し、対置される。詩人が個人の世界と自己陶冶の世界で発見したことに、人々はどうもとりとめられ魅了されるのである。<sup>9</sup>

もう1つのテキストは、ほぼ同時期にあたる1870年に発表された『シュライヤーマッヒャーの生涯』にある次の記述である。

私は、ヴィルヘルム・マイスターの流派を構成する小説を（というのは、ルソーの類似の芸術形式は小説に先々までの影響を与えなかったからだ）ビルドゥンクスロマンと名付けたい。ゲーテの作品はさまざまな段階における、いろいろな姿をした、人生のいろいろな局面での人間の養成Ausbildungを提示している。成長の失敗や存在をめぐる邪悪な情熱の戦いも含めて全世界が描写されているので、快適さが満ち溢れている。<sup>10</sup>

<sup>9</sup> Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung. Lessing, Goethe, Novalis, Hölderlin. Gesammelte Schriften. Bd. 26. Hrsg. von Gabriele Malsch. Göttingen 2005, S. 252f.

<sup>10</sup> Wilhelm Dilthey: Leben Schleiermachers. Erster Band. Auf Grund des Textes der 1. Auflage von 1870 und der Zusätze aus dem Nachlaß. Gesammelte

これらの小説に関する記述を、ディルタイはヘーゲルの『美学講義』における小説理論から継承している。テキスト間の移動で発生した差異については、すでに別の拙論で論じているので、<sup>11</sup> 本論には次のような結論を適用することにしたい。ヘーゲルは近代の小説を、中世以降に成立した騎士物語の近代版であると位置づけている。騎士物語の森や宮廷といった物語の舞台が、近代小説では官僚制や軍隊、裁判所などの公共の場に置き換えられ、それと同時に対峙すべき怪物は国家権力に形を変えて、騎士から市民の若者へと姿を変えた主人公に対峙することになる。やがて騎士が冒険に勝利し姫の愛も獲得するように、市民の若者は社会のなかで安定した地位を得て、恋人と結婚することができる。しかし我々は騎士物語を読んでいるとき、結末のあとに登場人物たちの人生に関心を持つことはないにしても、近代の小説に描かれている市民たちの生活には、ハッピーエンドの後にも現実の人生が続くことも頭に入れておかななくてはならない。

ディルタイはヘーゲルの小説理論にBildungsromanという名を付けたのであった。この変更の際に、小説RomanとビルドゥンクスロマンBildungsromanの交換が起こったことも、ビルドゥンクスロマンを小説という大きなジャンルの精髓であり、代表的な形式であるとみなす傾向につながった。時折突発的に表れる小説RomanとビルドゥンクスロマンBildungsromanの言い換え、あるいは入れ替わりは、このような経緯が影響して起こると考えられる。

ディルタイがヘーゲルの小説理論を伝承するにあたって大きく変更したポイントは3点ある。まず、オリジナルの議論に高貴さと誠実さ、真面目さ、思考力の深さを感じさせる文言に若干書き換えるという独自の解釈を若干加えていることである。この独自の解釈による変更はわずかであったが、全体の雰囲気精神化している。次に、ヘーゲルが近代小説の背景となる時代を

---

Schriften Bd. 13. Erster Halbband. Hrsg. von Martin Redeker. Göttingen, 1970, S. 299.

<sup>11</sup> Vgl. 拙論「ディルタイのヘーゲル小説理論受容 —19世紀におけるBildungsroman概念展開における一考察—」 小樽商科大学編『人文研究』第130輯（2015年12月）、139-158頁。



ルネサンス以降、どんなに狭く解釈しても18世紀初頭以降を想定しているにもかかわらず、ディルタイはこれをゲーテ時代、広く取っても1770年以降に、あるいは、『修業時代』や『ヒュペリオン』という作品が実際に挙がっていることからそれらの発表時期以降と解釈する場合には1790年代以降に狭めたことである。第三に挙げる点はもっとも重要であるが、先の拙論では言及していない。それは、ヘーゲルが騎士物語の書き換えとして想定した社会との摩擦を、ディルタイは現実に当時の若者たちがそのような葛藤状態にあったと既成事実化したことである。ヘーゲルの段階では、あくまでも物語にふさわしい冒険的なエピソードの例あるいは型として挙げられていた主人公と社会との衝突を、ディルタイは実際にそのような問題が発生しており、18世紀後半の若者が苦しんでいたと言い換えてしまった。ディルタイのテキストは、ヘーゲルの記述との表面的な類似性を保っているものの、その背景となる認識を転換することでまったく異なる文脈に変わっているのである。ディルタイが社会と若者の衝突を物語のパターンから当時の現実へと切り替えてしまったことは、今日に至るまでビルドゥンクスロマンの起源を説明しようとする際に悪い影響を及ぼしている。つまり、ビルドゥンクスロマンが騎士小説から近代小説への発展の中で登場したにもかかわらず、18世紀後半の社会問題から精神的な滋養を得て開花したジャンルだという誤った認識を産んだのである。ビルドゥンクスロマンの起源についての誤った認識が、先行するテキストの伝承と再解釈による変更という小説理論を発展させてきた基本的な原動力によって発生しているのはとても興味深い点である。ディルタイのテキストは、ビルドゥンクスロマン概念を広く普及させる影響力を備えていたと同時に、過去の小説理論との断絶ももたらしてしまったのである。

ディルタイのビルドゥンクスロマン概念についての説明は、今日に至るまでその有効性を保っている。彼の言い換えた言葉が事実と受け止められて用いられている研究は非常に多数に上るが、その1例のみ、先に続いてヤープスとクラウゼの研究から確認しておきたい。

伝統的な結びつきが解消する重要な契機は、社会的な発展や絶対国家の政治からも生じた。権力を集権化しようとする絶対国家の努力は、古い制度の解体につながり、貴族や領邦等族らの政治的な権限を次第に減少させることにもなった。さらなる生活領域で福祉国家的にして族長制的な規制が均質化という1つの方向へ及んだ。社会構造が変化する際に、絶対主義的政治の間接的な結果がはるかに重要な意味を持っていた。つまり、経済活動の計画的な刺激や官僚部門の増大によって、市民層が形成されたのだった。その政治的な立場は、伝統的な身分制の制度外にあった。商人や工場主、事務的な公務員、法律専門家や教員たちは、彼らの地位をもはや生まれによってではなく、彼らの個人的な活動と道徳的な資質に負っていた。同じことが新しい社会層に向けて執筆する作家や印刷業者についてもいえる。これらの新しい市民層は、伝統的に特権を与えられた身分に対して、自らを活動の新しい倫理感でもって身構えさせ、自己主張する明確な必要性があった。<sup>12</sup>

18世紀後半のドイツ語圏世界は、内に向けては啓蒙専制君主による近代化、外的にはオーストリアとプロイセンの対立やフランス革命などの、それまでの貴族的な社会から市民社会へ転換する過程にあったことは事実だが、小説ジャンルの形成には小説理論の発展が直接的かつ大きな意味を持っていた。しかしこの研究書では18世紀の小説理論の発展史は触れられず、政治と経済をめぐる社会状況こそがビルドゥンクスロマンに含まれる諸作品の創作を促したと主張されている。この点から考えて、デイルタイのテキストがこの主張の根拠になっていることが推測できる。デイルタイが用いた官僚という言葉を使いつつ、さらに商人や教員まで言及されている。そしてこれらの職業につく人々にとって個人の努力が必要であると主張することで、ビルドゥンクスロマンを発生させる契機は社会情勢にあったというデイルタイの概念規

---

<sup>12</sup> J. Jacobs/M. Klause, a. a. O., S. 41f.

定を支持しているのである。ディルタイのテキストを継承する際に、言い換えや解釈が事実と誤認されている。このような先行テキストへの無批判な追従は、ビルドゥンクスロマン概念やそこに含まれるとされる作品にとって不適切な状況と言わざるを得ない。

### 3. ディルタイのビルドゥンクスロマン概念の後継者たち

先に挙げた拙論で指摘したことであるが、ビルドゥンクスロマン概念普及に大きな役割を果たしたディルタイは、同じ著作の中でビルドゥンクスロマンの類似語（ビルドゥンクの物語Bildungsgeschichte, 発展小説Entwicklungsroman, 発展物語Entwicklungsgeschichteなど）を同義語として何度も用いている。もちろん『修業時代』や『ヒュペーリオン』など、ビルドゥンクスロマンとしてタイトルを挙げられている作品もこれらの用語で呼ばれている。そうした実際の用法から、ディルタイにとっては、ビルドゥンクスロマンのみを特別視して、現在の研究で探求の努力を重ねるほどに明確な定義をしようとする意図はなかったと考えられる。

たしかにビルドゥンクスロマン概念を提案したのはディルタイであるが、今日の用例に収斂させたのは、彼に続く多くの研究である。そのなかでも特に重要と思われるM. ゲルハルトとE. L. シュタールの研究を取り上げて今日の共通見解が形成された過程を考察してみたい。

ゲルハルトの研究は『ゲーテ「ヴィルヘルム・マイスター」までのドイツ発展小説』である。1926年に第一版が発表されている。<sup>13</sup> ここで主に検討の対象となっている作品は、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルツィファル』とグリンメルハウゼンの『阿呆物語』、ヴィーラントの『ア

<sup>13</sup> 今回用いるのは、1968年に無変更で再版された1968年版である。実際多くの研究で参照されているが、40年を経て再版されている点からも影響力の大きさが感じられる。Vgl. Melitta Gerhard: Der Deutsche Entwicklungsroman bis zu Goethes ‚Wilhelm Meister‘. 1. Auflage 1926 Halle, 2. unveränderte Auflage 1968 Bern.

ガトン物語』とゲーテの『修業時代』の4つである。それらの作品の中で描かれた主人公の成長過程で、時代の変遷によってどのような質的な違いが生じているのかを検討している。世俗の存在領域と宗教から支配される度合いも段階を経て変化している。13世紀の叙事詩『パルツィファル』では世俗が宗教に従属しているが、17世紀の『阿呆物語』ではこの2つの要素は対立する関係に変わっている。18世紀後半の『アガトン物語』においては、もはやこのような要素が有効か否かに疑いが生まれ、さらにその20年後に発表された『修業時代』では、対立の構造そのものが解消してしまっているという。<sup>14</sup>

ゲルハルトは、ビルドゥンクスロマンと発展小説の違いについてははっきりと述べている。発展小説は時代を問わない普遍的な形式で、ビルドゥンクスロマンはゲーテとゲーテ以降の作品と時期にのみ適用されるという。<sup>15</sup> 発展小説を「個人が世界と対立するということや、その個人が次第に成熟し世界に参入するという問題をテーマにしていて、その準備やこの過程の目的を扱っているすべての作品」<sup>16</sup>と定義している。個人と世界の対立や、個人が世界と折り合いをつけるという文脈、あるいは使われている単語と表現から、ディルタイの影響を明白に読み取ることができる。一方ビルドゥンクスロマンは、主人公の成長が自分の人生に対して目標と形式を探し出し、作り出すという課題を意味するようになった時に成立したのだという。<sup>17</sup> 上記4つの作品は、「個人化」の過程であるともいう。<sup>18</sup> 疾風怒濤期の小説は、世界との暴力的な衝突であり、結局それは不調和で終わらざるを得ない。つまり、そのためにビルドゥンクスロマンと呼ぶことはできない、という意味になる。<sup>19</sup>

このようにゲルハルトは、ビルドゥンクスロマンと発展小説の違いについて一定の説明は加えているが、なぜビルドゥンクスロマンを特別にみなさな

<sup>14</sup> M. Gerhard, a. a. O., S. 143.

<sup>15</sup> Ebd., S. 1.

<sup>16</sup> Ebd., S. 1.

<sup>17</sup> Ebd., S. 160.

<sup>18</sup> Ebd., S. 162.

<sup>19</sup> Ebd., S. 126.

くてはならないのかについて説得力のある根拠は提示できていない。ゲルハルトは、ヴィルヘルムがナターリエと最後に結ばれたことをもって、彼の成長は頂点に達したという立場をとっている。<sup>20</sup> これらの意見を総合して考えると、ゲルハルトの場合、ドイツの小説における成長の頂点は、ヴィルヘルムのナターリエとの結婚に集約されることになる。その他のビルドゥンクスロマン論においても、この「スーパーカップル」への称賛が延々と反復され、彼らの神聖な結びつきに絶対の価値が認められている。ゲルハルトは過去から『修業時代』までの期間のみを対象としているので、個人の発展の度合いは常に上昇するように描いているが、『修業時代』以降を扱う研究では、ヴィルヘルムほどの自己実現と社会の幸福な関係はもはや期待できないとして、幻滅と失望が繰り返し指摘されることになる。しかし、ヴィルヘルムの成長の成果は、ナターリエを花嫁に迎えることができたことに集約されるべき、あるいは象徴されるべきなのだろうか。中世から数百年の時間をはるかに積み重ねてようやく到達できたドイツ近代人の発達頂点だが、他者との結びつきによって補完されてようやく体をなすと考えると、非常に残念な程度でしかないことになりはしないだろうか。いずれにせよ、ゲルハルトの主張によると、『修業時代』以降近代人は自分の人生の目標と形式を自覚してその獲得のために努力し、作品を支える精神を発展小説的な段階からビルドゥンクスロマンが次から次へと発表できる状態へ根本的に変貌させたということになる。ゲルハルトの研究で注目すべき点は、ディルタイがあいまいに使用していたビルドゥンクスロマンの類似語・同義語に質的な差を設けたことである。本質的な根拠は示されていないにもかかわらず、ディルタイの特定箇所用例に基づき、ビルドゥンクスロマンを歴史的な文学用語として主張しているのである。この研究は多く支持され、本論の冒頭で確認した共通見解形成の先鞭をつけたのであった。しかし、概念を区別する根拠はゲルハルトが独自におこなった作品解釈の結果であるため、客観的な基準に乏しい。その

---

<sup>20</sup> Ebd., S. 142.

ため多くの研究がなぜ『修業時代』より後の作品がビルドゥンクスロマンで、それ以前には存在しえないのかを区別する根拠に窮し、釈然としないまま時代精神が変化したことなどを理由に挙げ続けることになったのである。

一方シュタールの研究成果は、ビルドゥンクスロマン概念のビルドゥンクの部分に注目したことである。彼はまずビルドゥンク概念の歴史を古代ギリシャの哲学から近代まで概観している。そのうえで中世から近代にかけては肉体のみならず精神においても神の似姿となることを目標とするキリスト教的なタイプのビルドゥンクが優勢であり、18世紀になるとヘルダーやヴィルヘルム・フォン・フンボルトが主張した現実の人生で個人の性質を完全にすることを目指す人間哲学的なタイプが登場して、両者が拮抗したという論を展開している。シュタールにとってのビルドゥンクスロマンは明快で、どの種類のビルドゥンクであっても、その枠内で主人公が人間成長という目標に向かっていく姿勢が描かれている小説を念頭に置いている。<sup>21</sup> 宗教的な告白書も小説ではないにもかかわらずビルドゥンクの過程が描かれているという理由でのちのビルドゥンクスロマンにつながる起源の1つとされ、<sup>22</sup> 『修業時代』においてビルドゥンクが表現された小説であるビルドゥンクスロマンが成立したと主張されている。<sup>23</sup>

小説のジャンルは、主な内容を表すキーワードを付けて「…小説」と呼ぶことによってきわめて単純に命名され、創設される。これは地域や場所、時代に限定されないで確認できる現象である。恋愛がテーマとなれば恋愛小説 *Liebesroman*、国家が舞台であれば国家小説 *Staatsroman*、犯罪をテーマとする通俗小説はドイツ語では犯罪小説 *Kriminalroman* であり、日本ではシャーロック・ホームズ等の影響が考えられるが、探偵小説と呼ばれている。ビルドゥンクスロマンという語が誕生した18世紀後半から19世紀前半にかけ

<sup>21</sup> E. L. Sthal: Die religiöse und die humanitätsphilosophische Bildungsidee und die Entstehung des deutschen Bildungsromans im 18. Jahrhundert. Bern 1934. Kraus Reprint. Nendeln/ Lichtenstein 1970, S. 137.

<sup>22</sup> Ebd., S. 118.

<sup>23</sup> Ebd., S. 167.

ての小説理論を分析すると、小説におけるビルドゥンクは、いろいろな文脈があるのだが、議論のテーマとなっているのは確かである。現在ビルドゥンクと小説を単純に結び付けた複合語ビルドゥンクスロマンを使った最初の例として確認されているモルゲンシュテルンの論文においても、小説におけるビルドゥンクについて検討されている。

シュタールがビルドゥンクを検討している理由は、ジャンルの分類における上記の小説理論の慣例に従い、逆にこの観念を明らかにすればジャンルの本質にたどり着けるはずであるという方針をとったためと予想される。残念ながら、ビルドゥンクスロマン概念については本質を言い当てることはできず、それどころか、その起源について敬虔主義の手記を含めるなど、小説史にさらなる混乱の種を提供する結果になってしまった。しかし多くの人が単純に予想するであろうビルドゥンク思想とビルドゥンクスロマンを関連付けて丁寧に論じた功績は大きい。ただし、シュタールの研究書には、ディルタイに言及がない。だからと言って影響を受けていないわけではない。それどころか、言わなくともわかると考えられていたほど自明のこととなっていたと考えられる。シュタールは、共通見解を暗黙の了解としたうえで、『修業時代』がビルドゥンクスロマンの最初の作品となるよう議論を構築しているのである。他の多くの研究においても、共通見解に同意している場合は概念の定義や歴史を改めて考察することはなく、そこで指摘されている内容でイメージを膨らませ、議論を次の段階へと進めている。シュタールが共通見解のビルドゥンクスロマン概念に基づいたうえで、ビルドゥンクを扱った小説というイメージに発展させているように、ビルドゥンクスロマンに含まれるとされる諸作品から、さらにそれらに共通するイメージを見つけ出し、それらを表現するジャンルと解釈を進展させている場合もある。例えば、劇場小説Theaterromanや空間小説Raumroman、芸術家小説Künstlerromanとしてビルドゥンクスロマンをとらえなおそうとする諸研究がそれにあたり、こうした種類の研究は無数にある。

#### 4. 共通見解の問題点

現在のビルドゥンクスロマン概念についての共通見解は、ディルタイのテキストに依拠している。ただし彼はビルドゥンクスロマン以外の類義語も同様に用いており、当初はこの用語がそれほどまで厳密な概念として想定されていなかったことがわかる。彼のテキストを踏まえて、この概念の適用範囲を『修業時代』以降に厳密に適用するべきだとしたのは、先に例としてゲルハルトとシュタールの研究を紹介したが、彼らをはじめとする多くの研究者の共同作業なのである。ビルドゥンクスロマン概念は『修業時代』以降に適用されるべき歴史的概念だとする意見は、客観的な基準によるものではなく、文化的な合意事項であるということができらるであろう。こうして成立している共通見解に含まれている問題とは次のようなものである。

第一に、ディルタイのテキストにすでに含まれている問題が挙げられる。彼は概念を定義する際に、それまで小説一般で、よい作品は主人公のビルドゥンクを描くべきだとする意見に焦点を当ててそれをビルドゥンクスロマンと名付けた。ここでよい小説のための一般論がビルドゥンクスロマン概念に転換している。この変更は、ビルドゥンクスロマンは小説の下位概念なのか、代表的形式なのかを曖昧にして数々の混乱を引き起こした一因である。概念の上位と下位の位置づけを混乱させただけでなく、ディルタイはヘーゲルを解釈して自らのテキストに取り込む際に、ビルドゥンクスロマン理論から小説理論一般にさかのぼるために必要な痕跡も消し去ってしまったのであった。たしかに、ヘーゲルの『美学講義』は19世紀の文化を考察するうえで重要な著作に数えられているため、直接の痕跡が無くなっても行き当たることは比較的容易である。しかしたとえヘーゲルに行きついたとしても、そこから18世紀の小説理論にさかのぼり、さらにその前へその前へとさかのぼり続けなければビルドゥンクスロマン概念発生の起源は見えない。ヘーゲルの『美学講義』における小説理論では、18世紀から続く小説理論が伝承されていることが現存するさまざまなテキストを比較することで容易に推測可能



である。<sup>24</sup> ビルドゥンクスロマン概念に関する先行研究では、先行するテキストへさかのぼり続けるこの道のりがよほど途方もない遠くに見えたのか、その努力を放棄して、先に確認したように、暫定的な共通見解をもって定義の代理とする方法が選択されてきた。ただ時折、ブランケンブルクの『小説試論』（1774）のようなテキストが出現した際に、それをどのように共通見解と関係づけるのかに頭を悩ませ、釈然としない点を抱えながらなんとかそれらを合理的にまとめ上げる努力がなされてきたのであった。こうして、実際にはそれほど小説の発展に直接大きな寄与がなかったと思われる社会問題が近代小説＝ビルドゥンクスロマン＝『修業時代』が創作される要因としてクローズアップされるという誤った方法が広がってしまったのであった。近代小説は18世紀を通じて創作され発展してきたものであり、『修業時代』もこの豊かな先例を踏まえて執筆されたのである。ビルドゥンクスロマン概念の起源を再検討することは、ドイツの小説史を正しく整理しなおす作業なのである。

ビルドゥンクスロマン概念をゲーテの時代を中心とする歴史的なカテゴリーとみなす立場は共通見解の特徴でもあるが、これはこの概念を誉め言葉（「名誉号としてのビルドゥンクスロマン」Bildungsroman als Ehrentitel）に導く危険があり避けるべきである。その理由は、ゲーテ時代はいつ終わるのかについて議論がきちんとなされていないからである。デイルタイがビルドゥンクスロマンについて最初に言及したテキストは、先に指摘したように1867年の発表である。ビルドゥンクスロマンに数えられることが多いシュティフターの『晩夏』は1857年、ケラーの『緑のハインリヒ』第一版は1854／55年に刊行されている。シュティフターやケラーは、現代からすればゲーテ時代に含まれることができるほど遠い過去の作品であるが、デイルタイに

<sup>24</sup> 以下の拙論で、ヘーゲル小説理論を象徴する「『市民的叙事詩』としての小説」という言葉をカギにして、彼の議論は18世紀後半の小説に起源があることを示した。Vgl. 拙論：「『市民的叙事詩』としての小説——近代小説理論の展開から読むJ. K. ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』」 In: 阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』56号（2014）、S. 5-27.

としては「10年ほど前に出版されたばかりの現代的な作品」であって、ゲーテ時代のように隔世の感をもって眺めることはできなかつたはずである。現代の研究が共通見解の歴史主義の規則に従ってゲーテの精神を継いでいるとして、『魔の山』や『ガラス玉演戯』をはじめさらにその後の作品を加えていくと、結局のところゲーテの精神の継承とは、『修業時代』のように出来の良い作品という程度の誉め言葉の言い換えほどしか共通項目を見つけられなくなってしまうのである。フリッツ・マルティニーはビルドゥンクスロマンという語の使用の起源を1817年のモルゲンシュテルンまでさかのぼって示した。モルゲンシュテルンが最終的に「よい小説はすべてビルドゥンクスロマンである」という結論に達したことに對し、概念の定義が不明確であると批判しているが、<sup>25</sup> 今でも多くの研究が同様の誤りを犯している。ビルドゥンクスロマン概念は、表向きは小説の類型としての体裁をもち、実際に主人公の成長物語という枠組みで適用することが可能である一方で、あの『修業時代』と似た雰囲気の商品という意味での誉め言葉であり、あるいは『修業時代』と同様に歴史に名を残すべき名作という意味でも用いられているのである。

『修業時代』をジャンルの歴史的・質的基準に用いることは、それ以外の作品にとって不当であるだけでなく、称賛されている当の作品にとっても非常に悪い影響を及ぼしている。まず、他の作品への不当性とは次のようなものである。『修業時代』における成長の成果を、先に指摘したように、結末のナターリエとの結婚が象徴していると解釈する意見が非常に多い。その場合は他の作品は筋が異なることが当然にもかかわらず、同様のハッピーエンドがないという理由で、小説としての価値が減じているかのような否定的な評価が与えられてしまうのである。幸福な結末を重視する傾向があまりにも強いと、ビルドゥンクスロマンとはハッピーエンドであると理解する研究

---

<sup>25</sup> Fritz Martini: Der Bildungsroman. Zur Geschichte des Wortes und der Theorie. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 35 (1961), S. 44-63.

も多い。その場合、結末で主人公が挫折したり進路に悩んだりして幸福感が不足しているとみなされた作品には、反ビルドゥンクスロマンという概念が適用されることもある。主人公が幸福になれたかなれなかったかに注目して進行する議論は、それ以外のエピソードや言語的な表現の技術については評価の対象としておらず、単純で短絡的であるだけでなく、文学作品から多様性と豊饒性を剥奪している。

『修業時代』の解釈にとっても、従来の共通見解は悪い影響を及ぼしている。なにより、結末においてヴィルヘルムは「完璧な人間になった」と評される場合があるが、生きている人間が完璧になり、その後完全無欠な状態で生き続けるかのような不自然な評は、たとえば誇張だとしても避けるべきであろう。18世紀には確かに人格陶冶を完成させることが議論されていたが、それはその時代の精神に起因する発想であり、先行するテキストを踏襲することで議論の正当性を確保する文学理論にあっても、批判的な見直しが必要である。このような極端な評価も芸術作品を対象とするために、物語としての象徴性や非現実性を鑑みて許容されるかもしれないが、それでもこの小説は普通に暮らしていると想定した人々を描写しているのだから、極端な観念化は避けるべきである。『修業時代』の面白さは、単純な成長や人格の完成ではなく、過ちや迷いを重ねながら進行する人生を肯定することである。<sup>26</sup> また、ビルドゥンクスロマン概念についての共通見解は、『修業時代』の幸福な結末を頂点とする歴史哲学的構図を備えているため、その続編にあたる『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』をどのように位置づけていいのかという問題に対しても、合理的な答えを出せていない。この続編に言及するビルドゥンクスロマン概念研究もあるが、『修業時代』のみを扱う場合に比べるとはるかに少ない。また、同じゲーテの作品にもかかわらず、主人公がピストル自殺をする『若きヴェルテルの悩み』はどのように位置づけるべきかが判断に迷うのか、ビルドゥンクスロマン研究でほとんど研究対象にされ

<sup>26</sup> Vgl. 拙論「『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は「教養小説」なのか？」  
阪神ドイツ文学会編 『ドイツ文学論攷』 第44号（2002）、67-87頁。

ない。あるいは、ディルタイが言及しなかったために取り上げる必然性がないとする意見もあるだろう。このように、ビルドゥンクスロマン概念の共通見解は、『修業時代』に端を発したはずであるにもかかわらず、ゲーテの作品にとっても不合理で有害なのである。

このように従来のご見解は、文学作品の解釈に役立たないどころか、称賛の対象としている『修業時代』にとってさえ百害あって一利なしなのである。文学理論は、作品の面白さ、豊かさを支えるものでなくてはならず、誤って機能している場合には何らかの修正が必要と考えられる。

## 5. おわりに ビルドゥンクスロマン研究の進むべき方向

ディルタイはゲーテ時代の文学作品を特別大事にしているように見えるが、彼はシュライヤーマッヒャーやヘルダーリンといったその時代の人物に注目して論じているので、テーマの取り方からして自然だといえる。ただし彼に続く研究がその一言一句に従って普遍的な定義を導きだそうとしたことは無理があり、事実と異なる認識に至ったことは素直に反省するしかない。文学史のあるべき姿が見えにくくされてしまったことが一番大きな問題で、『アガトン物語』や『ヘルマンとウルリーケ』など、『修業時代』の前にも主人公の成長が描かれる作品があったことが認識されているにも関わらず、それにふさわしい評価や位置づけができなかったことは改善すべきである。ビルドゥンクスロマン概念研究でこれまでの共通見解のようにディルタイのテキストを真実として無批判に受け入れるのではなく、基準として参照しつつも事実と整合性を図る努力を行えば、『修業時代』の前にも後にも、限りなくビルドゥンクスロマン的に人間の内面の成熟が描かれる作品を見つけることができるであろう。

18世紀ドイツの小説理論の特徴は、人間中心主義である。つまりそれは、人間の心理状態に注目し描写の対象として認識したこと、そして冒険や複雑な出来事などの外的な要素のみならず、人間が変化していく過程という内面

的な要素も小説の題材となりうることを発見したことである。そしてこれにまつわる議論が19世紀まで継続し、やがてデイルタイによってビルドゥンクスロマンと命名されたのであった。これらの経緯から鑑みて、この概念は確かにドイツの18世紀初頭から現在まで300年にわたって継承されてきた議論であるので、近代小説の代表的形式であり、きわめてドイツ的といえることができるかもしれない。しかしこれまで主張されてきたように、この概念のビルドゥンクの部分から連想される精神的な高尚さによる特別な雰囲気によってそのような形容に値するからではない。ビルドゥンク論のテキストは、多義的な言葉のイメージによって議論の文脈が転換していくことが避けられない。しかしそのような転換があることを自覚することによって、議論の方向性を把握して概念の見取り図を描くことができるであろう。このような努力を研究者は続ける必要がある。ただし、曖昧なイメージを産むとはいえ、逆に豊かな思いを込められるビルドゥンクスロマンという語はインパクトがあるので継続して使用すべきである。もしデイルタイがこの概念の定義をした箇所、他の同義語である教育小説や発展小説を選択していたとすれば、これほど重要な概念へと発展することはなかったであろう。ただし、これまでの使用されてきた発展小説のように、新しい意味のビルドゥンクスロマン概念＝「教養小説」はビルドゥンクの状態と質に細かくこだわることなく、成長物語の類型とすべきである。「教養小説」は18世紀ドイツの理想の小説像を19世紀ドイツで命名したものであるが、時代と場所を超えて普遍的に見出しうる。テキストは他のテキストとの影響関係で成立している。言葉で表現されたことは、参照され、再解釈され、継承されている。後から登場したテキストが、それに先立つテキストの位置づけや意味を変更させてしまうことがある。こうしたテキストの間で時代の前後に関係なく相互に作用する力を間テキスト性（インターテクスチュアリティ）という。<sup>27</sup> ビルドゥンクス

<sup>27</sup> 間テキスト性の概念については、次の研究を参考にしている。Vgl. グレアム・アレン『文学・文化研究の新展開 ―「間テキスト性」―』 森田孟訳 研究社 2002年。

ロマン概念は、間テキスト性の模範例といえるだろう。前のテキストを受けている箇所を見つけやすく、議論が暫時発展していく過程が観察できる。このテーマで先行するテキストを追跡すると、近代小説理論の出発とされる17世紀末までさかのぼることができるのである。その時代から時代順にテキストの変化を確認すると、小説への非難・批判と虚構概念の認識の変化が小説理論に影響を与え、発展させていった過程が浮かび上がってくる。また、間テキスト性の立場に立てば、「教養小説」が18世紀から時代をさかのぼってバロック時代や、中世、ミレトス風物語の中に発見されても概念の整合性は保たれる。

その一方で、従来のビルドゥンクスロマン概念の共通見解についても、単なる誤った文学史への認識と否定し切り捨てる必要はない。それどころか、なぜ誤った認識につながったのかは文化的に見て非常に興味深い現象である。先に指摘したように、共通見解は『修業時代』のハッピーエンドを過大に尊重していた。その理由については次のようなことが考えられる。社会との葛藤に悩んでいたのは、小説の主人公ではなく、共通見解を支持していたインテリ層そのものだった。彼らは、ヴィルヘルムが完璧な人間になるという解釈をすることによって主人公とともに夢を見て、自分が感じまいとしている不安を克服しようとしていたと読むことができる。あるいは、主人公の幸福に共感し賞賛することで、自分もその賞賛される側に与する資格があるとアピールしていたのかもしれない。小説理論は19世紀において市民層の主流哲学になった。なぜならヘーゲルが小説を「市民的叙事詩」と呼び、市民が描かれると定義したため、それを論じる小説理論が市民の精神文化を論じる場としての機能を帯びることになったのである。ビルドゥンクスロマン概念をめぐる問題は、作品と作品評の二方向関係にとどまらず、作品と作品評、さらにその作品評を現実世界の文化的枠組みから分析することもできるのである。

小説Romanという散文形式の叙事文学につけられた近代的な名称が17世紀末にフランスから取り入れられ、文学ジャンルとして認識されるまでの一

世紀は、小説擁護者と小説反対論の意見の対立であった。しかしその過程で今日のビルドゥンクスロマン概念の基となる理想の小説像が徐々に形成され、小説がドイツでも文学形式として広く認知されてくると、小説理論は市民的叙事詩として、市民の内面生活を支えるようになっていくのである。18世紀の終わりまでは文学理論の問題であり、19世紀に入るところからドイツ市民層のアイデンティティー形成という文化論に接続することになる。ビルドゥンクスロマン概念の歴史はこのように複雑な性格を帯びているために、これまでは整理されていなかったと思われる。

本研究は、以下の科研費の支援を受けた研究プロジェクトの一環である。

〔課題番号〕 26770115／〔研究種目〕 平成26年度 若手研究 (B) ／〔研究代表者〕 ／〔研究課題〕 18世紀から現在にいたるBildungsroman概念の展開に関する文献学的研究

JSPS KAKENHI Grant Number 26770115